



学部長  
挨拶

## 理工学部の魅力

理工学部は戦後に歴史的な苦難の道をたどりつつも、2022年に矢上キャンパスは開設50年を迎えることができました。一方で、“With コロナ”として、社会の活性化に向けた動きが定まりつつある今日この頃ですが、世界情勢のすべてが必ずしも安定的な発展に向かっていないことは確かな状況と思います。また、カーボンニュートラルやSDGsなどへの要求は、社会的、政治的な要因が強いことは否めないものですが、異常気象や自然災害の発生状況から、科学技術の分野において積極的な対応が求められていることも事実かと思えます。そうしたなか、さまざまな分野で科学技術の進展が一層重要になってきていることは確かなことであり、理工学部での学びは今まで以上に将来重要になると思っています。

本塾理工学部における「学び」の特徴は、“学びの庭への入口”という意味を込めた「学門」において、入学後に自分の興味や関心に応じて徐々に学びたい分野を絞っていき、2年進級時に所属する学科を決定するところにあります。そもそも理工学分野は理学・工学といった、分野をまたいで活かせる知識が得られる場になります。しかしながら、最近の社会における重要なキーワードとして、サステナビリティ（持続可能性）、レジリエンス（回復力・柔軟性）、ダイバーシティ（多様性）がよく聞かれるようになっており、こうしたことは理工学分野だけではなく人文科学や社会科学分野にも関わることとなります。もちろんグローバルな視点を養うためには語学も重要になります。このため、専門分

野に加え総合教育セミナー、グローバルリーダーシップセミナーなど総合教育科目として多くの領域を学べるようにカリキュラム構成が行われております。これにより、理工学部は化学や物理をはじめとするさまざまな実験を通じた現象の理解とともに、プログラミングによる情報解析に基づいた理論的な考察を行いつつ、科学技術の社会・環境への影響も考える機会を設けることで、理学・工学だけではなく文理融合の視点から、社会システムに関わる内容を深く学ぶことができる場になっています。

慶應義塾の理念に、「自我作古」という言葉があります。これは、前人未到の新しい分野に挑戦し、たとえ困難や試練が待ち受けていても、それに耐えて開拓するという、勇気と使命感を表した言葉となっています。このためには、一人ひとりが想像力を高め、真理を追求する姿勢が何よりも重要となります。さらに、前人未到の領域において「道を拓くために目標となる方向性を定めること」を意識し、困難や試練が待ち受けていても「努力を継続すること」を心掛け、また開拓して得られた事象に対して「価値を見出すこと」が必要となります。これは、曾國藩の『家訓』の引用として解釈されている、白川静氏の「志・恒・識」の姿勢にも通じるものと考えています。こうした理念を忘れずに、世界におけるグローバル化の先を見据えた研究・教育活動の場を提供していきたいと考えております。理工学部・理工学研究科での学びをもとに、一人でも多くの皆さんが世界に飛躍できることを信じております。

慶應義塾大学 理工学部長  
村上 俊之